うくだは空をとんだか

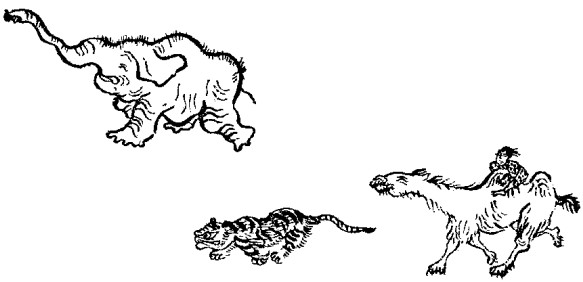
かつおきんや作

梶山俊夫画

かつおきんや作

らくたは空(そら)をとんだか

梶山俊夫画



N. D. C. 913/240 P/23 cm = 菊判

かつおきんや作品集　2
■ らくだは空をとんだか ■
一九七一年一一月一五日　初版発行
定価　六五〇円

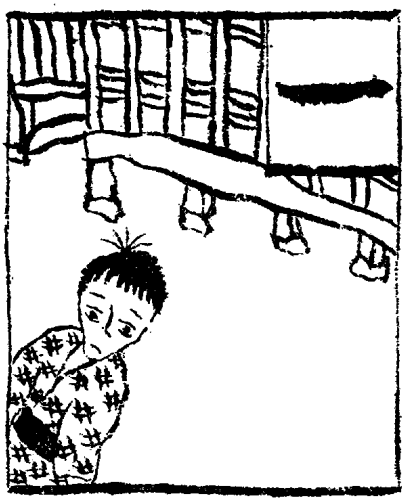
著　者　かつおきんや©
発行者　牧　芳　枝
発行所　株式会社 牧書店
郵便番号　一六二
東京都新宿区揚場町一
電話(〇三)二六九―二〇八一
振替　東京一九六四八三

印　刷　第一印刷
サン平版印刷
製　本　ナショナル製本
・乱丁本・落丁本はおとりかえいたします

(分) 8393　(製) 08002 (出) 7909

「これ。よしお。早うこんかいね。そんなとこで立っとらんと……。」

先を歩いていたおかあさんが、立ちどまってふりかえりました。よしおは酒屋のへいのそばにくっつくようにして、じっと前を見ていて動きません。おかあさんは、よしおの見ている方を見ました。犬です。やせた白い犬が、あめ屋のかどで、うんこをしているのです。



「十歳にもなっとって、なんやいね、あんなのら犬ぐらい。」

でも、よしおは、かすりの着物のそで口をいじっていて、動こうともしません。

「なんで、こんなに弱虫なんやら……。」

おかあさんはひきかえすと、あれた手でよしおの肩をひきよせました。おかあさんのかげにかくれるように、ぴったりとからだをよせて、よしおは、おそるおそる歩きだしました。

「死なれたとうちゃんが見とったら、なんというやら……。」

おかあさんに何といわれようと、しっかりとしがみついて、できるだけ犬からはなれ

て、よしおは通りすぎます。用のすんだ犬は知らん顔で反対の方へ歩きだします。そっちを何度も、よしおはふりむきます。

「そんなにおそろしいのかい。」

よしおは、小さな小さな声で答えます。

「おそろしい。」

「弱ったもんや……。」

そして、このみすぼらしいみなりのふたりづれは、あめ屋にもまんじゅう屋にも、どこにもよらず、店のならぶ観音町を、ずっとのぼって行きました。

さむらいがまだいばっていた慶応二年（一八六六年）という年の秋の、金沢です。

そのころ金沢は、百万石の殿さま、前田家のお城があって、日本じゅうでも有名な大きな町でした。その大きな町の西の方に、卯辰山というなだらかな山があり、その山すその一方に観音院という大きなお寺があります。観音町は、そのお寺へ行く通り道にあたる、にぎやかな町です。よしおとおかあさんは、そこを通って今観音院へ行くとちゅうなのでした。

観音町の先は、だんだんゆるやかな石段になっていて、ゆっくり弓形にまがってお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

り、しまいは急な石段が五十以上もあります。それをのぼりつめると、目の前に、みごとにそりかえった赤っぽいかわら屋根の本堂がそびえています。このお寺へは、前田の殿さまをはじめ、その奥方、おひめさまなども、一年に何回もおまいりにきます。それほどありがたい観音さまをおまつりしてあるのです。

本堂の前の大きな香ろから、いつもむらさきの煙が立ちのぼっており、ろうそく立てには何十本ものろうそくが、山風にゆられながらもえています。今も、何人もの人がおまいりをしていました。

かみのまっ白なおばさんがお経をとなえているかと思えば、その横で若い女の人が手をあわせています。お店のだんならしい人もおれは、職人らしいももひき姿の男の人もおまいりしています。

それぞれ、みんな、何かお願いがあるのでしょう。

おかあさんは、よしおの手をひいて、そこへ進みました。そのとき、右手の広い境内で、山の木きのこい緑色をうしろにして、何やら、ま新しい板べいができているのが、ちらっと目にはいりました。長い、大きなへいです。へいの前にある蓮池が、いつもはかなり広く見えるのに、きょうはとてもせまく見えます。

五日ばかり前にきたときにはなかったものです。何のためのへいでしょう。

でも、おかあさんは、深く考えようとはしません。何も注意する気がおきませんでした。それよりも、おまいりがだいじです。持ってきた小さなろうそくに火をつけて立てると、手をあわせました。

――なんとかして、この子の病気がなおりますように。そのためならば、どんなことでもいたします……。

よしおは、見たところ、ふつうの子と何もちがっていません。だけど、こまった病気をもっていました。それは、だれとでも話をするのに、大きな声、いえ、ふつうの声も出せないという病気なのです。ふつうの声でしゃべろうとしても、のどがつまり、したがもつれ、おしまいには胸がしめつけられるようになって、いきも出なくなるのです。だから、小さな小さな声でしか、しゃべられないのです。

それに、とてもおくびょうです。今も酒屋の所でそうだったように、犬もこわい、ねこもこわい、かみなりなどはもちろんのこと、外に出ることが、だいいち、すきじゃありません。もちろん、そんなようすですから、友だちなど、ひとりもいません。いつもひとりぼっちで、だまって、じっとしています。そのようすを見ていると、おかあさんは、胸がいたくなります。もとはといえば、声が出ない病気のせいだ、おかあさんはそう思うのです。

それで、笠をぬう内職をしてはたらいては、これまで、何人ものお医者さんにもみてもらいました。いろんなくすりものませました。おきゅうをすえに、何日もかよったこともあります。お宮さんで、おはらいもしてもらいました。でも、ちっともよくなりません。あとは、もう、観音さまにおまいりするほかはない、おかあさんはそう思いました。そこで、お茶絶ちをしたのです。よしおのこの病気がなおるまで、ぜったいにお茶はのみませんと、観音さまにちかったのです。もう、それも半年になります。いつ、その御利益があらわれるのでしょうか。

きょうも、おかあさんは、心をこめておまいりをしました。そして、もどりかけたのですが、ふとい声によびとめられました。

「ちょっと、あねさん、これはおまえさんのでないか。」

こん色のももひきをし、はっぴを着た、一目で大工の親方とわかる男の人が、手ぬぐいをさし出しています。おかあさんは、すぐ腰を手でさぐりました。はさんであった手ぬぐいがありません。

「どうもおそれいります……。」

ていねいに頭をさげて、それをうけとりました。親方は、かみの毛に白いものがまざっていますが、つやのいい、赤ら顔をし、いかにも長年仕事できたえたらしい、ごっつ

い指をしています。手ぬぐいを渡すと、おかあさんに話しかけました。
「何か、特別なお願いでもあるのかな。ねんごろにおまいりをしておられたようやけど。」
おかあさんは、ちょっとためらいました。よしおは、早くもおかあさんのたもとのかげにかくれます。
「えらく、人みしりをする子やな。ぼうず、そんなにかあちゃんにくっついとらんと、こっち出てこんかい。」
明るいおだやかな口ぶりで、よしおに話しかけますが、よしおは、ぴったりとおかあさんにしがみついたままです。それを見て、おかあさんは、親方に話をする気になりました。

「そうか。それはかわいそうになあ……。」
おかあさんが、よしおの声の出ないことをいうと、親方は大きくうなずきました。
「生まれたときから、ずっとそうなのかね。」
「いえ、赤んぼうのときは、それはもう、大きな声で泣く子でした。二つぐらいからなんです、出なくなったのは。」

「それは、そのころ、何か重い病気でもしたせいか。」
「……。」
おかあさんは、だまって頭を横にふりました。ほんとうは、よしおが、どんなときから声が出なくなったか、おかあさんははっきりおぼえていました。
それは、とこやをしていたおとうさんが、町の役人の所へ、お米のねだんをさげてくれとたのみに行き、なまいきなことをいうなと、つかまえられ、ろうやに入れられて、死んだときからなのです。なぜそうなったのか、わかりませんが……。
でも、今はじめて出あった知らない人に、そんなことまで話すわけには行きません。だまっていると、親方がいいました。
「いや、見ず知らずのもんが、立ち入ったことを聞いて、ごめん、ごめん。どうも、おせっかいなたちでな。気をわるうせんでくれ。」
「いえいえ。とんでもありません。あのう、いかがでしょう。親方さんなんか、いろんなことをごぞんじと思うんですが、こんな、声の出ん子が出るようになったような話は、どこかで聞かれたこと、ないでしょうか。」
「そうよのう。こうっと……。」
親方は、うでぐみをし、その左手をあごのわきへもって行くと、目をふせて考えこみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ました。おかあさんは、そのようすを見るなり心の中でひとり言をいいました。
――やっぱりだめや。これまで、どんなにたくさんの人に、同じことを聞いたものか。
そやけど、いっぺんも返事は聞かれなんだ。今度も同じや……。
よしおは、おかあさんからちょっとはなれて、お寺の屋根ののきばに、すずめが十羽ばかりならんで、チョンチョンととんでは遊んでいるのをながめていました。おかあさんは、よしおをよんで、もどろうと思いました。
そのとき、親方が、いきなりポーンと、いせいよく手を打ちました。すずめはパッといっせいにとび立ち、よしおはビクッとしてこちらを見ました。
「何か、ちょっとかわったことをさせるといい。」
親方は、いかにもいい思いつきをしたように、うれしそうにさけびました。
「かわったことって、どんな……。」
「ほれ、このむこうに卯辰八幡があるやろ。あのお宮さんの境内に、今から三、四十年ばかり前、らくだがきたことがある。」
「らくだって……？」
「天竺にすんでおるといわれる、馬のばけものじゃ。」
天竺というのは、インドのことです。遠い遠い所です。親方はつづけます。

「そのらくだを見せ物にしたわけやが、そこへつれて行って、らくだのからだに手でさわったら、それまでひと言もしゃべれなんだおしの子が、いっぺんにしゃべれるようになったんや。」
「ほんとですか。」
「ほんとうの話や。わしも本人をよう知っとる。安江町の東別院の近くに、坂下屋っていう古着屋、知らんか。あの店のおやじがそうなんや。」
「そうですか。……そやけど……。」
おかあさんはうつむいて、つぶやくようにいいました。
「らくだなどという、日本にはおらぬけものを、どうして、見たりさわったりできるでしょう。」
とたんに、親方は目を丸くしました。
「あれ。ねえさんは、あの話知らんがか。」
「あの話って……？」
「この小屋は、」
と、長い大きな板べいをゆびさして、
「らくだやら、ぞうやらをおいとく小屋や。あすからここで見せ物があるって、町にち

らしも出とるけど、ねえさん、ほんとに聞いとらんがか。」

おかあさんは、ほんとうに知りませんでした。そう聞いてみれば、こんなに大きなへいがこいのできているわけが、なっとくできます。おかあさんは大きくうなずきました。

「そうか。知らなんだんか。今ごろは、きっと、お城で殿さまがごらんになっとるはずや。ぞうとらくだと、それにとらもおるんや。それだけで料金はひとり百文ちゅう話やさかい、安いもんやがいや。そうやろ。」

そして、親方はよしおの方を見ました。よしおは蓮池のそばへ行って、水の上をツイツイすべるみずすましに見とれていました。親方は、おかあさんの顔を見て、ちょっと声をひそめました。

「りこうそうな子やがいや。つれてきて、なおしてやるこっちゃ。」

「はい。……でも、ほんとうに、そんなことでなおるもんでしょうか……。」

「いや、そりゃあ、ぜったいになおるとは、わしもいいきれんぞ。そやけど、ちゃんとなおったものがおるんやさかい、なおらんともいいきれんわけや。」

「……。」

「ま、これも、ひとつの機会やと思うて、ためしてみることや。百文でなおれば、もう

けもんやがいや。な。」
親方はそういうと、その小屋の方へもどって行きました。よしおのそばを歩きながら、よしおにちょっと声をかけましたが、よしおはびっくりして見かえしただけで、何もいいませんでした。

おかあさんは、よしおと石段をおりながら、話しかけました。
「よしお。あのでかいへいは、らくだやら、ぞうやらを入れる見せ物小屋なんやと。かあちゃんな、知らなんだけど、あすから見せ物なんや。よしおは、らくだ、見たいかい。」
よしおは、だまっていました。何だか、こわい気がするだけです。
「いやなんか。」
よしおは、コックリしました。
「そうか……。」
それきりおかあさんは、何もいいませんでした。歩きながら、さっきの親方の話を、ほんとうだろうかと考えていたのです。
観音町の通りをすぐ右に折れ、一町ばかり行くと、右手に卯辰八幡のお宮さんがあり

ます。すぎやまつ、ひのきなど、緑のあざやかな卯辰山をせおって、卯辰八幡は、いかにも神さまがすんでいるらしく見える大きなお宮さんです。さっきの親方の話では、この境内で、三、四十年ほど前にらくだの見せ物があったということでした。おかあさんも生まれる前の話です。毎日のようにこの前を通るのに、ちっとも知りませんでした。

そう思いながら、おかあさんが、お宮さんのひはだぶきの屋根などを見て歩いていると、しっかりした男の子の声がしました。

「おっかさん。」

それは、よしおの兄の与吉でした。十年近く前に、おとうさんがなくなったあと、よしおの兄ふたりは、よそへあずけられました。いちばん上の政吉は、建具屋をしているおじさんの所へ、次の与吉は染物屋をしているおじさんの所へ行きました。ふたりは、ときどき、何かのついでに、おかあさんの所へよるのです。

与吉は、こんのかすりの着物に、同じ色のまえだれをきちんとしめて、よしおより二つしか年上でないのに、とてもしっかりして見えます。たしかに染物屋の小僧さんです。

「おっかさん、こんにちは。」

きちんと手をそろえて、おじぎをします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com